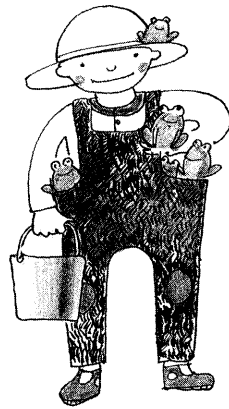


保育園での個人用おもちゃ

山口 陽子



△生活発表会で▽

色とりどりに布貼りされた十六個の箱積木がプレイルームに無造作に置かれています。

「さあ、自動車に乗ってカレーライス広場に行こう！」の保育の声に、十六人の一歳児たち（この時はみな二歳になっている）「一歳児クラス」の子どもたちが迷うことなく自分の箱積木に、いっせいにまたがって床をけっ

て出発です。テーブルや戸板を組み合わせて坂にした「道路」を走りぬけると、「こんどはみんなでつながって、電車にしようか。」と保育が提案。だれの次に自分の箱積木をつなげるかで、ちょっとはトラブルがあるものの、「○○ちゃんのことつけても」いいか？、「いいよ。」などと子ども同士声をかけ合いながら、十六個の箱積木が一本の電車に

つながります。みんなで電車の歌を歌いながら気分よく走っていくと、突然、山の影から赤鬼。「積木でおうちを作ってかくれよう！」と、乗っていた箱積木をひっぱっていった、あわててバリケードを築く子どもたち。中にはあわてすぎて、自分の箱積木を放っておいて逃げてきた子も。「あつ、○○くんのや。」と、それをちゃんと取ってきてくれる親切な子もいます。こうして、何とかできたバリケードの中から「鬼は外！」と豆をまかれて鬼は退散。「よかったね。」と再び車を走らせて着いたカレーライス広場で、「カレーライス鬼」(カレーライスの歌ででき上がったカレーのブタ肉やジャガイモなどになった子が食べられないように逃げる鬼遊び)をして楽しみました。

と、ざっとまあこんなストーリーで展開した生活発表会でした。ちょっと見ただけでは

ストーリーのつじつまが不自然でわかりにくいのでは、という評もありましたが、子どもたちの大好きな箱積木を使って、いつもやっているごっこ遊びや、追いかけてかくれ遊びのいくつかを、保護者の人たちにぜひ見てもらいたいという思いがありました。

△保護者が作った箱積木▽

この箱積木は、保護者ひとりひとりが、半年ほど前に自分の子のために作ったものなのです。三年くらい前に保母が作った箱積木がみんな大好きで、車にして乗り回していたのですが、次々と消耗して数が少なくなっていて、よく取り合いになっていました。とりあえず、数をそろえようと、クラス懇談会の時に「おもちゃを作る会」を計画しました。その時、保母は欲ばりなことを思いついたので、みんなですぐ共同財産としてのおもちゃ

でなく、この際、以前から考えていた個人用おもちゃを作ってもらうことにしよう。懇談会の時に、欠席の人の分も含めてみんなでトマトのダンボール箱を分解して組み立て直し、牛乳パックに新聞紙をつめたものをほめこんで箱の形にすると、共同作業しました。そのあと各自、家へ持ち帰り、気に入ったように布貼りしてもらいました。

△なぜ個人用なのか▽

この一歳児たちは四〜十一月生まれで、年度当初からことばもよく発達しており、みんなで共感し合ったり、イメージを共有して遊べる反面、ある場所でもしろそうな遊びが始まると、サッと寄ってきて、友だちの持っているおもちゃや場所をとってけんかになったり、その様子を見ていた子がけんかの仲裁に入ってたいたりひっぱったりと更にけん

かの渦が広がることもしばしばありました。またおもちゃを数多くそろえても、ちよつとの違いを見分けて、これでなければとこだわる子や、たくさん同じ物を集めたがる子もいます。物の取り合いを通して「順番に使おうね」ということも大切だけれど、ひとりひとりがけんかをせずにじっくりと物とかかわって遊べることも保障したいと、個人用おもちゃを考えていたところだったので。

保育園ではタオルとか服など生活用品は個人持ちがほとんどですが、おもちゃはたいがいみんなの物です。保育が目新しい物を持って部屋に入ると、「センセのか?」とか、「みんなのか?」とすぐ尋ねるし、だれかに貸そうものなら、「○○ちゃんのか?」と聞きまです。けんかになると、「みんなのやでー。」(だからボクが使ってもいいはずだ)とか、「○○ちゃんのをやでー。」(みんなのだけれど

も今は自分が使っていることを主張) などということばを使い、一歳児なりに「みんなの」、「じぶんの」などの所有関係の複雑さを頭の中で考えて、ことばにしているのでしょう。そんな時に、所有関係の明確な「個人用おもちゃ」があることによって、一歳児たちにとってよりわかりやすく考えることができているのではないだろうかという期待もありました。

△予想以上の展開▽

個人用箱積木は保護者の労力や費用の心配はあったのですが、数日のうちにでき上がって持ってきた自分の箱積木に、どの子も誇らしげで、お互いの箱積木を「○○ちゃんのとすぐ言い当てるのはびっくり。乗り物に見立てての遊びのほかにはテーブル、椅子、ベッドに。また紙しばいを見る時にこし

かけて見やすい位置を作ったり、友だちを呼んで「いっしょにすわろ」と共感し合ったりしています。舞台にして上で歌ったり、イタズラの時の踏み台に使うことも思いついた子どもたちです。また、手ごわい相手にも「じぶんの」を主張できたり、「かして」「使っていないよ」などのことばも自然に出てきたように思います。

また、けんかをして泣いている友だちにその子の箱積木を持ってきてなぐさめてやっている姿を見ると、子どもたちはこんなにも自分の自分のおもちゃに愛着を感じて心のよりどころにしているのか、と感動しました。

またこんなこともありました。ある時、箱積木をつなげて一本橋を作り、その上をそろりそろりとみんなで渡る遊びをしていました。すると突然ゆうちゃんが足元に自分の箱積木を発見。「ゆうのやー。」と抱きかかえて

しまつて、他の子が通れなくなりました。保母は、あわやけんかに…と思いましたが、後続の子たちは、なんとゆうちゃん箱積木のところだけ下において、次の箱積木へと移っていったのです。「これはゆうちゃんなのだから」と認めて、みんなは一つの遊びを続けたわけです。

このように、この個人用箱積木は私たちの予想以上に子どもたちの生き生きといろんな心や遊びの場面を見せてくれたので、その姿をぜひ発表会で見てもらいたかったです。

「くりのみは何でも（バザーや大そうじとかも…）保護者にやらせるんだから…」という文句が聞こえるのではと心配していたのですが、発表会後の懇談会で「文句言いたかったけど、作ったかいがあったワ」と言われ、

ホッとしました。

△おわりに▽

この文章は、昨年度受け持っていた一歳児クラスでの保育のまとめの一部を、担任三名で記録していたものをもとに書いたものです。

『幼児の教育』にはしばらくごぶさたしていたのですが、最近見せていただいた、十一月号「幼稚園のなかのいざこざ」（倉持氏）や十月号「心が育つということ」（豊田氏）に子どもの、物や人へのかかわりについて深く観察、研究されたものを読ませていただき、現場の保母としては、大変勉強になりました。

（京都市・くりのみ保育園）